

名古屋 文化情報

2023

Summer

No. 406

NAGOYA
Cultural
Information

Pick Up Gallery / ギャラリー彩

随想 / 声楽家(バリトン) 近野賢一さん

この人と... / 三代舞踊団主宰 三代真史さん

視点 / 障害のある人もない人も一緒に本を読む

#zoom up / 道化師(クラウン) ラストラーダカンパニー Changさん、LONTOさん



2023

Summer

表紙

「濯」

(2018年/H183cm×W184cm/紙本《麻紙》、岩絵具、膠)

「時や所」を描くのではなくて何かしらの想いを描くことができたら…と制作しました。佳いことがあることを願って…。



鷓飼千佐子

名古屋市に生まれる
名古屋造形芸術短期大学 造形芸術科 日本画コース卒業・同専攻科修了
1978年～白土会展に出品
1981年～個展10回、グループ展多数
現在、白土会会員

Contents

- Pick Up Gallery ギャラリー彩…………… 2
- 随想 声楽家(バリトン) 近野賢一さん…………… 3
- この人と… 三代舞踊団主宰 三代真史さん…………… 4
- 視点 障害のある人もない人も一緒に本を読む…………… 8
- #zoom up 道化師(クラウン) ラストラダカンパニー
Changさん、LONTOさん……………10

「なごや文化情報」編集委員

- 杵屋六春 (長唄・唄方 名古屋音楽大学講師)
- 桐山健一 (舞踊・演劇ジャーナリスト)
- 黒田杏子 (ON READING)
- 鈴木敏春 (美術批評・NPO法人愛知アートコレクティブ代表理事)
- 瀧津清仁 (指揮者)
- 望月勝美 (編集者・ライター)

Pick Up Gallery



船坂芳助 版画展(2018年3月14日～3月22日)

ギャラリー彩

1981年3月、ギャラリー^{あや}彩は愛知芸術文化センター(愛知県美術館)を臨む名古屋・栄にオープンし、開廊記念として「熊谷守一展」を開催しました。ビル入口の看板や案内状のロゴにシンボルとして使用している「彩」の字は、開廊以来交流のあった洋画家の故・杉本健吉氏が開廊10周年記念に「今後も純粋な気持ちで画廊を続けるように」という言葉とともに揮毫^{きごう}してくださったものです。

開廊当初より『アートの裾野を広げたい』との理念のもと、美術関係者以外の方々にもアートを身近なものとして気軽に楽しんでもらいたいと願ってきました。今後も時代の変化、作家のニーズに柔軟に寄り添えるギャラリーを目指し、美術を愛するすべての皆様と共に歩んでいきたいと思ひます。

設立 1981年3月 代表取締役社長 杉本知枝美
住所 〒460-0003 名古屋市中区錦三丁目25-12
AYA栄ビル
電話 052-971-4997

取り扱い作家 船坂芳助、森岡完介、大島幸夫、牧内則雄
臼井治、川上明子、中島佳子、浅井啓介 ほか

ウェブサイト <https://www.ayasakae.com/>

随想

シューベルトのリートに魅せられて



声楽家（バリトン）

こんの けんいち

近野賢一

京都市立芸術大学大学院修了。青山音楽賞新人賞受賞。フライブルク音楽大学大学院、ならびにミュンヘン音楽大学大学院修了。これまでにドイツ歌曲による2枚のCDをリリース。令和4年度名古屋市民芸術祭賞受賞。現在、岐阜大学教育学部准教授、名古屋音楽大学講師。

ドイツ語の詩に音楽が付けられた歌のことをリート（Lied）と呼びます。

私が歌を学び始めたのは高校2年の春、奇しくもその年はシューベルトの生誕200周年のメモリアルイヤーでした。そのためテレビで「シューベルトを歌う」というレッスン番組が、数か月にわたって放映されたのです。その時点で声楽について私が知っていたことと言えば「3大テノールはすごい人たち」くらいのものでしたが、1回30分間のその番組を視聴する中で「声楽にはこんな分野があるのか！これがまさに自分が歌いたい歌だ！」と衝撃を受けたことを覚えています。

番組の講師で、伝説的なバリトン歌手であるディートリヒ・フィッシャー＝ディースカウが指摘する詩の解釈やそれに伴った演奏の繊細さ、ピアノと歌の関わりへの深さ、そしてシューベルトのリートに虚飾を排した美しさ、とりわけその内向性に、みるみるうちに引き込まれていきました。それ以来、私はリートに虜となり、リートを歌い続けています。

中学校の音楽の授業で、シューベルトの「魔王」を鑑賞した方も多いのではないのでしょうか。ピアノパートの三連符やそれが表すもの、また子どもの「お父さん、お父さん」という叫びが強烈な印象を残します。教育実習生として私が中学校へ実習に行った際にこの曲のさわりを歌うと、すぐに「魔王の先生」と覚えられ、

楽しく実習を終えることができたものです。しかしこの曲は作品番号1として出版された、18歳のシューベルトの一作品であり、ほんの一面に過ぎません。

シューベルトのリートに接するとき、「純粋さ」とも表現できる彼の姿勢に、私は強く惹かれます。それは「欲の無さ」と言い換えることができるかもしれません。他者に抜きん出て、ことさらに自分をアピールしようとする音楽には感じません。そこが彼の個性となって光り輝くとともに、人の痛みを理解してくれるような深い優しさを、間接的に感じさせるのです。

昨年、リサイタルで取り上げた「冬の旅」は、特に暗く過酷な作品です。主人公は絶望や怒り、孤独感とともに街を後にします。そのような旅にも関わらず、私たちが魅了され続けるのは、自分と主人公を重ね、一緒に真冬を歩いて痛みを味わい、そしてその傷が癒されるような経験をするからかも知れません。

シューベルトは音楽史上では「歌曲の王」と称されますが、私の想像ではその呼び方を彼が喜ぶとは思いません。ただひたすらに詩と純粋に向き合い続けた結果、600以上のリートが生まれたのでしょう。シューベルト作品を演奏する者にも、この「純粋さ」が求められ、それが失われた途端に分厚い壁が立ちはだかるように思います。私もシューベルトのリートを歌う者として、作品への情熱に、ただ素直にまっすぐ向き合い続けたいと思います。

この人と...



←名古屋市文化振興事業団公演「天国と地獄」(1991年) ↑三代真史の気迫があふれる

三代舞踊団 主宰

みしろ まさし

三代 真史さん

「カリスマ」という言葉は、「彼」のためにある言葉であると思う。カリスマとは「人の心を惹きつける強い魅力」であり、「彼」とはダンサーの三代真史(1960年、福井県敦賀市生まれ)のことである。新聞記者だった私が初めて彼を取材したのは27年前の1996年。当時、すでに三代は名古屋市文化振興事業団の企画公演「天国と地獄」(1991年)に出演して脚光を浴び、翌92年には全国ジャズダンスコンクール(東京)グランプリと、名古屋市民芸術祭賞(舞踊部門)を獲得。名古屋の舞台芸術界の新星として注目の存在だった。口数は少なく、大声で自己主張することも少ない寡黙な人だが、ひとたび舞台上に立てば唯一無二のダンススタイルで観客を魅了する。そんなカリスマ・ダンサーの生い立ちと人柄を紹介しよう(文中敬称略)。

(聞き手:上野 茂)

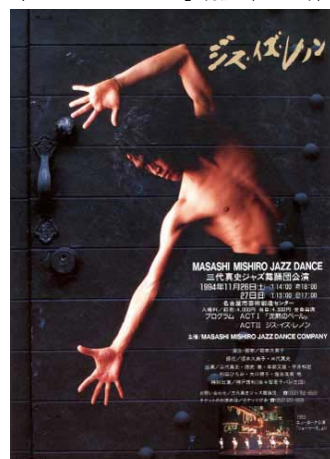
衝撃を受けた「ジス・イズ・レノン」

私が初めて見た「三代真史ジャズ舞踊団」(現在は三代舞踊団)公演で上演されたのは「ジス・イズ・レノン～生と死の追憶～」(1996年・名古屋市芸術創造センター)だった。世界の音楽界に革命を巻き起こしたビートルズの結成からジョン・レノンの死までを描いた創作ダンス劇(脚本、演出・坂本久美子、振付・三代真史)。ビートルズを知る世代にはたまらない、愛しく切ない物語だった。数々のエピソードが、せりふのないダンスと音楽のみで表現できることに私は衝撃を受けた。三代舞踊団の代表作の中で、最も好き

舞踊団旗揚げ公演(1990年)



「ジス・イズ・レノン」初演(1994年)



な作品になった。

同作は1980年に暗殺されたジョン・レノンへのオマージュを含め1994年に初演された作品。三代がビートルズの素晴らしい音楽に触発された作品でもあった。話題になったのは劇中の休憩時間。ビートルズを演じたメンバーが、舞台上で時間が止まったように不動の姿勢を15分間保ち続けたのである。彼らは脂汗を流して耐え切った。客席からは何度も拍手が沸き起こった。

人生の大転機そして舞踊団設立へ

舞踊団創立の経緯を聞いた。三代は中京大学卒業後、故郷の敦賀(福井県)に戻り、高校の保健体育教員になるはずだった。ところが、大学4年の時に出会った名古屋YMCAのジャズダンス講師の坂本久美子から「あなたの才能は世界に通用する」と熱心にダンスを勧められた。教員がダンサーか、大いに迷った末、三代はダンサーへの道を選んだ。中学の教員だった父親は激怒したが、「得意のアクロバットを取り入れた独自のダンス劇を創ってみたい。この機会を逃したくない」と、YMCA入りを決意した。



松陵中学器械体操部時代



中京高校時代1978年国体に出場



父母、姉に囲まれる三代（4歳）



ドイツでの体操祭では旗手を務めた



全日本学生選手権で優勝した大学時代

当時を振り返り、坂本は「体操で鍛えた身体能力、天性のセンスと表現力を目の当たりにして、世界中の観客を魅了することのできるダンサーに成長すると直感しました。もちろん、彼の人生を変えてしまうわけですから、重大な責任を感じました。ご両親にも申し訳ないと思いました。それでも、三代君に賭けてみたかった」と回想する。

ダンスブームの追い風もあり、YMCAの「三代教室」は大盛況で、大きな収益を上げた。そして1990年、NHKのエグゼクティブ・プロデューサーだった伊豫田静弘の勧めで「三代真史ジャズ舞踊団」を発足させた。主宰は三代、芸術監督は坂本。創立メンバーには三代に心酔する徳武徹、種山雅之らが参加。同年12月には名古屋市市民会館で舞踊団結成記念公演を開催した。



不良少年を演じた第1回「サムライ公演」（1997年）

人気を博した「サムライ公演」

先に「ジス・イズ・レノン」を紹介したが、三代舞踊団には「羅生門」「蜘蛛の糸」「服部半蔵」「ジャパニーズ・ビジネスマン」ほか多くの代表作があり、繰り返し再演されている。それは豊かなドラマ性があるからに他ならない。

ドラマ性とは、社会性であり人間性、さらに言えば「普遍の愛」なのである。観客は坂本が構想し、三代らダンサーが体現する愛のドラマに感動し幾度も公演に足を運ぶのである。

市井の舞踊団の圧倒的多数を占めるのは女性だが、三代舞踊団には男性ダンサーが多い。そこで坂本が提案したのが男性だけの「サムライ公演」だった。1997年に行われた第1回サムライ公演は男性7人、翌年の第2回公演には外部の人材を加え28人も男性が出演した。ダンサーだけではなく、空手の練習生やミュージシャン、好奇心旺盛なジャーナリストも加わった。結局、同公演は2004年の第7回公演まで行われ、三代舞踊団の名物公演になった。参加した外部の男性たちは三代の人間性に触れ、舞台の面白さに魅了されたのである。

中でも第2回サムライ公演で上演された「弁慶～安宅の関」は傑作だった。歌舞伎「勸進帳」をダンス劇化した異色作だった。観客は弁慶に扮した三代の力強さに圧倒され、義経を演じた徳武の名演技に胸を熱くしたのである。見事な坂本演出だった。

身体能力培った敦賀の海水浴場

さて、ここで時間軸を戻し、三代の少年時代から大学卒業までの「体操人生」を振り返るとしよう。

両親は教育者で、父は中学、母は小学校の教師だった。小学校の6年間は母親と同じ敦賀市立松原小学校で過ごし、敦賀市立松陵中学では3年になった時、父親が同じ中学に赴任してきた。「おかげで修学旅行は父と一緒にした」と三代は苦笑する。

「僕は活発でやんちゃな少年でした。ある時、悪さをして廊下に立たされていた時、母が通りかかりました。あの時の気まずさは今も忘れられません」



By KIRKA KINZEL

CHICAGO, Aug. 7 — People have asked for decades what jazz dance is, yet basic questions about it remain unresolved: Should it be performed as jazz music? Should it be set to an accompaniment? Rhetorically, it has been a free (think Elvis), unscripted (think Fanny) and often (think Sassy Ballroom) form, based on improvisation and mimicry. The genre has always been important.

The most recognizable piece of jazz dance on display this weekend at the 14th annual Jazz Dance World Congress here was "Jazzman Machine," a tribute to Gogo Centeno performed on Friday night by Centeno.



「ダンスマガジン」2001年8月号



Masashi Action Machine in "Jazzman Business" for Kirika Kinzelo and Masashi Machine



ジャズダンスの指導を受けた恩師フランク（ニューヨークで）↑

敦賀市の地図を見ると、松原小は敦賀湾に面し、海水浴場のある松原公園の敷地内にあり、松陵中は松原公園の南側に隣接している。三代は少年時代「砂浜でバク転の練習をしたり、高い崖から海に飛び込んだりして遊びました」と回想する。彼の強靱な身体能力は、この海岸で培われたのである。

テレビ番組のヒーローに憧れるのも少年の常。「小1から『柔道一直線』に憧れて柔道を始めました。3年の時には千葉真一のアクションを真似、中1の時はブルース・リーの映画を見てカンフーに夢中になりました」

器械体操志望も新体操へ

器械体操を始めたのは中学時代。「入学と同時に器械体操経験のある先生が赴任されたので、体操部を作ってほしいとお願いしました。2年間は同好会、3年になって正式な部として活動を開始しました。当時の運動部を経験した男子なら分かると思いますが、厳しいスパルタ教育でした。活動中は水分補給も禁止。僕らは密かにタオルに水を含ませ、それでのどをうるおしました。今思えば笑い話ですね」

さて、高校進学である。「体操で身を立てたい」の思いはすでにあり、それにふさわしい名古屋の中京高校を選択した。「高校野球の有名校で、見学に行くと素晴らしいスポーツ施設がありました。器械体操部を志望したのですが、新体操部の人員が足りないからと、新体操部に移るよう指示されました。入部後、いきなりインターハイ（全国高等学校総合体育大会）に出場。個人の部で3年生の先輩が第2位になりました。僕はその先輩を超えることを目標にして頑張りました。3年の時、個人2位になりましたが、結局インターハイでの優勝は叶いませんでした」



海外でも好評を博した「ジャパニーズ・ビジネスマン」

「運動部は原則寮生活で、毎朝6時に起き、練習漬けの毎日でした。3度の食事も清掃も当番制で、おかげですっかり料理が上手くなりました（笑）。練習では先輩たちの厳しい洗礼を受けました。3年になった時、自分たちの代で古い慣習を終わらせようと、下級生に手を上げないことを決めました」

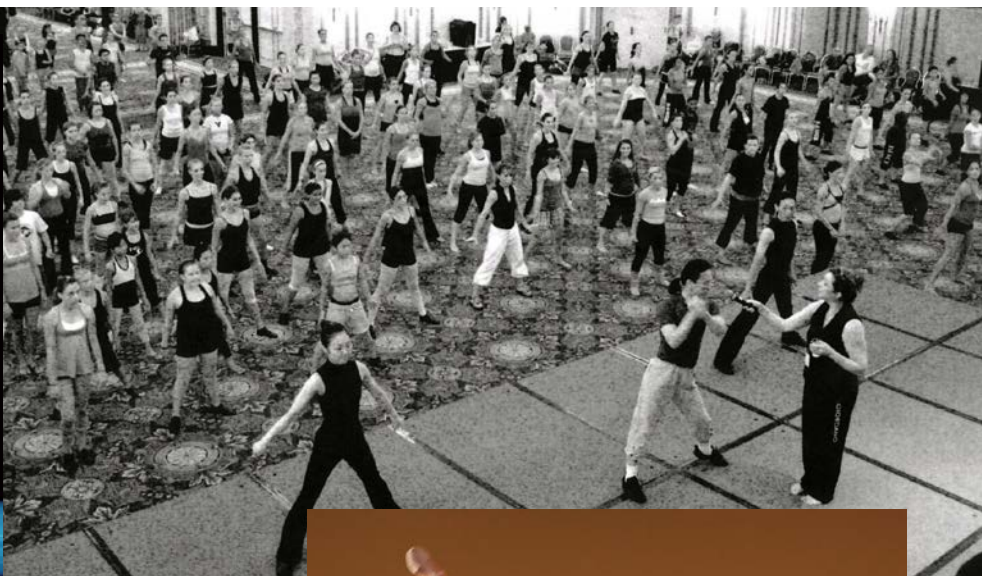
中京大学に進学した1年の時、ドイツのピュルシュタットで開催された体操祭（International Gymnastic Festival）に日本代表として出場し、最優秀賞を受賞した。三代は開会式で日本国旗を掲げて行進した。高校時代より一段と厳しい練習と向き合い、部長になった4年の時、オールジャパン（全日本新体操選手権）で優勝。インターハイでの無念を果たした。

2000年ヨーロッパツアー実現!

さて、話は三代舞踊団設立時の1990年に戻る。舞踊団は同年「ジャズダンス・ワールド・コンGRESS」に招待を受け、米国、ドイツ、メキシコなど世界各国で演技を披露した。そのステージで三代のダンスに興味を持ったドイツのプロモーターから声が掛かった。日本の舞踊団では初となる2000年ヨーロッパツアーの実現だった。海外でよくある「〇〇祭」「〇〇フェスティバル」への自費参加ではない。プロの舞踊団「Masashi Action Machine」として世界デビューしたのである。

芸術監督の坂本は「三代舞踊団がスカウトされたのは、日本人特有の武士道精神と、新体操で磨き上げたシャープでアクロバティックなダンスのマッチング。今まで、世界のどこにもなかった斬新なパフォーマンスだったからだと思います。特に好評だったのが『ジャパニーズ・ビジネスマン』でした。勤勉で礼儀正しい日本のビジネスマンの日常を、ユー

2021年 第25回選抜公演



モアを交え構成した作品。どの国の会場でも、熱烈なスタンディング・オベーションを受けました」と感動の日々を振り返る。その後ツアーは恒例化され、ヨーロッパからアメリカ、アジアへと広がり、米国を代表する新聞「The New York Times」に掲載され、CNNテレビで紹介され、ついには「Dance Magazine」の表紙を飾ったりもした。

長男・晃史ダンサーデビュー

ここで三代のプライベートな部分についても紹介しておきたい。高校、大学、社会人生活を通し、一貫してダンスと音楽に生活の大半を費やしてきた三代が伴侶を得たのは2009年のことである。相手は長年クラシックバレエを学んできた乗倉奈津美。父親の仕事の関係で、少女期はシンガポール、中学・高校時代は米国で暮らしてきた国際感覚あふれる女性である。たまたま目にした三代舞踊団のホームページに惹かれ、2006年にオーディションを受け入団した。以来、周囲に気づかれることもなく二人は愛を育んだ(らしい)。

2016年には長男・晃史^{あきと}、その3年後には長女・真子^{まこ}が誕生。「僕の少年時代以上に活発な子で、足も速く、運動神経も優れているようです」と親バカぶりを発揮する三代。晃史はすでにダンサーデビューしている。

三代の愛車「ポルシェ911 Carrera 4S」についても触れておきたい。`アスリート、の代名詞が示すように、性能、スタイルは折り紙付き。スーパーダンサー三代に相応しい名車である。三代はこのクルマに20年間乗っている(23年4月現在の走行距離は約25万キロ)。贅沢や道楽ではない。良いものを大切に、末永く。それが三代の選択なのである。

新たな`三代舞踊団、を確信

最後にダンスの変化、舞踊団の将来について聞いた。三代は現在、新栄にある名古屋文化短期大学の客員教授とし



↑2007年シカゴでのダンスワークショップ
←珍しい三代と奈津美のデュエット

てダンスの指導をしているが、「僕らの世代にとってダンスは特別なものでした。しかし現代の若者たちにとってダンスは日常の一部。難しい振りも訳なくこなします。難点はメンタルが弱いことでしょうか。そういえば`ハングリー精神、という言葉も死語になってしまった。抗うことはできない。そういう時代になったのである。

実は私には、三代舞踊団の行く末について懸念があった。「主力ダンサーが優れているほど、後継者が育たない」。そんな実例を幾つも見てきたからだ。創立以来、舞踊団を支えてきた徳武徹、種山雅之も三代と同世代。男性にこだわるわけではないが、3人に匹敵するようなダンサーは、もう現れないのではないかと、思っていた。

ところが2021年7月の第25回選抜公演「DRUMS VS. DANCE」で懸念が吹き飛んだ。出演した楠崎陸人、種山敢太ら、少年たちのアグレッシブなダンスに、若き日の三代、徳武、種山がオーバーラップしたのである。それもそのはず。種山敢太の父は種山雅之、母は三代舞踊団歴代ナンバーワンの女性ダンサー塩谷友美というサラブレッド。2、3年のうちには、三代の息子・晃史が加わる。主力ダンサー川地暁子の息子・藤井創太もいる。数年後には新たな`三代舞踊団、が再び脚光を浴びるに違いない。私はそう確信している。

障害のある人も ない人も一緒に 本を読む

視覚に障害のある人とない人が同じ一冊の本を読んで語り合う読書会「よむ・きく・はなす」は、社会福祉法人名古屋ライトハウスが運営する情報文化センターが2020年から企画している催しです。このユニークな試みはどのように始まったのか。点字・音声図書はどのように作られているのか。施設長の岩間康治さん、職員の矢野友香さん、本企画の発案者であり、現在は同法人の別施設で働く中田義雄さんにお話を伺いました。（まとめ：黒田杏子）

点字図書、音声図書について

一まず最初に、名古屋ライトハウス 情報文化センターとはどのような施設なのでしょう。

岩間：視覚の認識に障害がある人が必要とする情報を提供しています。具体的には、点字・音声図書の制作と貸出、白杖など生活を助ける用具の販売、IT支援や、さまざまな暮らしのご相談も承っています。2019年に「読書バリアフリー法案」（※注1）が成立、施行されたことを受け、本を読むことに困難を感じている様々な方にこの施設を利用していただくことを目的にしています。例えば、障害者手帳を持っている視覚障害者の方以外にも、発達障害で文字の理解が難しい方や、ディスレクシア（識字障害、読字障害など）の方、ほかにも上肢障害でページをめくれないという方たちにも、できるだけ多くの本にアクセスできる環境づくりを進めています。



世界の国旗を紹介する点字図書。

一今、点字図書、音声図書は何タイトルくらいあるのでしょうか。

岩間：当センターでは両方あわせて3万タイトル強くらいでしょうか。それ以外に、2009年から運用が開始された、サピエ図書館という全国の視聴覚情報提供施設が作成した、約80万件の点字データと音声データが集約されたウェブサイトのプラットフォームがあります。利用者が直接ダウンロードしたり、視聴

覚情報提供施設や公立図書館でダウンロードして貸出をしたりという形で利用されています。

一点字図書、音声図書ができるまでを教えてください。

矢野：月に一度の選書会議で本を選びます。利用者からのリクエスト作品に加え、選定委員5人がひとり7冊ずつ持ち寄る候補作から選定し、ひと月に各20冊を点訳・音訳するという流れです。点訳・音訳それぞれ、100名以上のボランティアの皆さんが作業を進め、完成までにおよそ半年くらいかかります。貸出の際は、音声図書はCDで、点字の場合は点字図書で貸出しています。アクセシビリティでいえば、サピエ図書館の方が便利ですが当センターには司書がいるので、本の相談を受けられるという利点があります。ちなみに利用者には、時代小説、推理小説、官能小説が人気ですね。



名古屋ライトハウス情報文化センター。
点字図書が並ぶ。

障害のある方とない方が出会う場をつくる

一読書会「よむ・きく・はなす」を始められたきっかけを教えてください。

中田：施設長をはじめ、約三分の一の職員が視覚障害者である情報文化センターで一緒に働いたことで、視覚障害について徐々に理解し体感していった私自身の経験は大きかったですね。現代の日本では視覚に限らず、障害者は社会からは大変見えにくい存在になってしまっていると感じています。多くの人にとって「接し方がわからない」相手になっているように思います。視覚障害者の暮らしの向上に尽力された多くの先達は、社会的にも時代的にも、まずは人として当たり前の権利を行使できる環境づくり、制度づくりに注力せざるを得ず、市井の人たちに視覚障害者への関心や理解を深めたり、当センターの

ような施設を、利用する人にとって心地よい居場所にするのは、やや後回しになってしまったように思います。でも今であれば、当センターの取り組みを社会に開くことで、障害がある人となんい人が出会う機会をつくれる。それはささやかだけど、とても大事なことなのではないかと思ったことがきっかけです。視覚

障害の有無に関係なく、同じ本を読んで語り合うという場をつくることは、図書館であり、かつ点字・音声図書を制作している当センターだからこそできることだと思いました。



読書会のチラシには点字が印刷されている。

一参加者の反応はどうでしたか？

中田：最初は、視覚に障害のある方とお話するのも初めて、という方が大半でした。とはいえ視覚障害について話をするわけだけでなく、本の話をするわけですよね。お互いに同じ本を読んできた読書会の参加者ということでは一緒なんです。少人数での開催ということもあり、初回からリラックスした場ができたと思います。

矢野：晴眼（※注2）の方が、テーブルに置いてある音声図書の再生機器に興味を持って「これどうやって使うの？」と視覚に障害のある方に教わったり、表紙の色や装画など本の外側について視覚に障害のある方が晴眼の方に聞いたりといった交流が生まれています。アンケートでも、課題本についてや読書会の運営だけでなく、視覚障害を身近に感じる事ができたとか、街で視覚障害者を見かけた時に意識するようになった、というお声をいただいています。



読書会の様子（2022年9月11日撮影）

ここで起きていたこと

一私が参加させていただいた第三回では、作品の中に、見た目で国籍を判断するという場面がありました。視覚に障害のある方が「自分は目が見えないから、見た目で人を判断するっていうことがわからないんですが、どんな感覚なんでしょうか？」とおっしゃられて、はっとしました。そういう問いかけがあったことで、私たちは普段何を見ているんだろう、見えているってどういうことなんだろうと考えることができました。ケアをする・されるという立場ではなく、同じ本の読者として晴眼者と視覚障害者がフラットに話ができるという経験は初めてでした。

中田：印象に残っているのは、第二回で作品に大垣（岐阜

県）の話が出てきたことから、大垣の昔の風景を話してくれた晴眼の方がいました。するとそれを聞いた視覚に障害のある方が、ああ、そうだったそうだったって、話し出したんです。見えていた頃のことを思い出されていたんですね。それは作品からではなく他の参加者の言葉から呼び起こされた記憶なんです。そのやり取りが、とても自然で良かったんですね。

街の中で言葉を交わす

一この場でしか起きないやりとりが生まれていると感じます。今後の展望はありますか？

矢野：次回は2023年9月に開催予定です。リピーターの方も多いのですが、新しい方にもどんどん参加してほしいと思っています。第六回からは私が選書を担当していますが、課題本によっても参加者の顔ぶれも替わるので、会の雰囲気や目的は変えずに選書の系統を少しずつ変えて、様々な方に参加してもらえるように工夫したいと思っています。

中田：私は、センターの協力のもと、別の場所で新たなイベントを企画しています。今秋には、視覚障害者に参加してもらおう、戯曲を読むワークショップを開催します。俳優や演出家にも来てもらい、舞台が出来上がるまでのプロセスを体験するというものです。こうした取り組みを繰り返すことで、イベントの場だけではなく、街で参加者同士が偶然再会し、言葉を交わすとか、横断歩道で困っている視覚障害者を見かけた時に声をかけやすくなるとか、そうしたちょっとした変化で、誰もが少しずつ暮らしやすくなるのでは、と考えています。

一多くの方に体験してほしいですね。今後も楽しみにしています。



左：矢野さん 中：岩間さん 右：中田さん

※注1 正式名称は「視覚障害者等の読書環境の整備の推進に関する法律」

※注2 視覚に障害がないこと。

- 第一回（2020年9月）：『ショウコの微笑』著：チェ・ウニョン
監修：吉川 風 訳：牧野美加、横本麻矢、小林由紀（クオン）
- 第二回（2021年3月）：『すべて名もなき未来』著：樋口恭介（晶文社）
- 第三回（2021年11月）：『「国語」から旅立って』著：温 又柔（新曜社）
- 第四回（2022年3月）：『もう革命しかないもんね』著：森元 斎（晶文社）
- 第五回（2022年9月）：『ポッティチェリ 疫病の時代の寓話』
著：パリー・ユアグロー 訳：柴田元幸（ignition gallery）
- 第六回（2023年3月）：『ラトゥ・ルプーは語らない。—沈黙のピアニストをたどる20の素描』
編：板垣千佳子（アルテスパブリッシング）

#zoom up

ズーム・アップ

道化師(クラウン)

ラストラーダカンパニー

チャン

Changさん

ロント

LONTOさん

名古屋市に生まれ、名古屋市を拠点に活動しているラストラーダカンパニーのChangさんとLONTOさん。上海万博・ミラノ万博・エジンバラ国際フェスティバル出演など国際的にも活躍し、クラウンの世界大会WCAコンベンションで金メダル受賞の経験もあるお二人。2023年4月には「らふいゆれふいゆ」がこども家庭庁令和5年度児童福祉文化賞推薦作品に選ばれました。そして、Changさんは名古屋市文化振興事業団第37回芸術創造賞、LONTOさんは令和4年度愛知県芸術文化選奨文化新人賞を受賞。北海道から沖縄まで日本全国を飛び回り、忙しい毎日を送っているお二人にお話を伺いました。(聞き手：吉田明子)



名古屋市文化振興事業団 芸術創造賞授賞式



愛知県芸術文化選奨文化新人賞授賞式

子ども時代のお二人

Chang：小さい頃は運動が嫌いでした。走るのも遅く、勉強も苦手でした。3人兄弟の末っ子で、年の離れた兄たちが優秀だったため、比べられるのが嫌で、「勉強も運動もしません」と言って生きていました。頑張り方もわかりませんでした。でも、食べることが好きだったので、小学生の頃から休日は、家族みんなの昼食を作るほど料理は得意でした。だから、将来は料理人になりたいと思っていました。

LONTO：子どもの頃は、ゲームやおもちゃ・漫画などを買ってもらえない家だったので、ゲームやおもちゃは自分で作っていました。自由帳に自分でスーパーマリオなどファミコンの絵を描きBGMを口ずさみ、それで友達とゲームをした気になって遊んでいました。

高校生くらいまでは人とコミュニケーションをとるのが好きではなく、自分の世界を楽しむタイプでした。でも、表現をしないだけで、心の中には思っていることや言葉がたくさんありました。ごく稀だけれど、そんな自分の心の内面を覗いてくれる人に出会えた時は嬉しかったです。

クラウンとの出会い

Chang：高校2年生の時に、たまたま新聞の折り込み広告で、クラウンの専門家チームのプレジャーBによる半年がかりのクラウン養成講座があることを知り、母が「面白そうね」と言ったのがきっかけでした。料理人の道に進むつもりだったので、海外に修業に行った時に芸があれば何かの助けになるかと思い受講することにしました。その講座の受講生は社会人が多く、僕一人だけ高校生だったので、たくさんの人にかわいがってもらいました。受講後も調理師の専門学校に通いながら、お祭りやイベントに連れて行ってもらう出演したりと、手伝いのようなことをしていました。

LONTO：高校では友達と同じ演劇部に入りましたが、ずっと裏方のスタッフをしていました。高校を卒業した後は就職しましたが、毎日同じような仕事をしているうちに、「自分はなぜここにいるのか」と悩み1ヶ月で退職しました。その後、自分の好きなことを仕事にしたいと思い、演劇か芸の道に進もうと決めました。〴〵演劇はひとりではできないけれど、芸人は自分ひとりでもできるのではないかと考え、プロの芸人を目指すことにしました。芸の道に進むと決めてからは、独学でパントマイムの練習をしていましたが、クラウンの勉強もしておいた方が良くと思い、プレジャーBのクラウン養成講座を受講しました。

その後本格的にクラウンの道へ

Chang：楽しくて肌に合っていたため、その後もプレジャーBに所属してクラウンを続けていました。次第に自分と同世代の仲間が増えていき、一人でパフォーマンスを行うのではなく、チームで公演をしたいという意識が強くなりました。その中の一人がLONTOです。

どっぷりクラウンの魅力にのめり込み、2005年には日本



国際マイムフェスティバルinモンゴル
前列左がChangさん、一人置いてLONTOさん（2007年）

国際博覧会（愛・地球博）でレギュラーパフォーマーとしても活動しました。気が付いたら専門学校を卒業して8年経っていました。料理人になることは忘れていませんでしたが、



モンゴルにて（2007年）

ある時、兄に「お前も頑張ってるよな」と言われたんです。小さい時はうまくいかないと「もういいや」と思っていたのですが、これが頑張るといことなのかと初めて気が付きました。頑張れば結果が出て、人に喜んでもらえる。提供して喜んでもらえることは料理人と同じだと考えるようになりました。

クラウンは「自分が力を注げるもの」だとわかり、その後は迷うことも、やめようと思うこともありません。その頃から海外での活動も増え、海外向けの作品も作り始めました。

LONTO：役を演じる俳優と違い、クラウンは常に自分です。パフォーマンスをしていない日常においても自分が変わっていくのがわかりました。パフォーマンスをすることで自分の心がほぐれていくのを感じ、すごく笑うようになったんです。技術を習得することは難しいことですが、それすらも楽しく



「サーカスの灯」初演（2017年）

感じることができるようになり、人生観が変わりました。

観客である子どもたちは、言葉を使って伝えなくても、何かを感じとって声をかけてくれます。そんな子どもたちのように感じとってくれる人が増えていけば、救われる人がいると思います。

ラストラーダカンパニーを設立して6年目に

Chang：幅広く何でもやるのではなく、「自分たちにしかできないことを、自分たちが届けられる相手に届けよう。二人でオリジナルをつくり、心躍るときめくパフォーマンスをしよう」という思いで、LONTOと二人で2018年1月にラストラーダカンパニーを立ち上げました。その思いを形にできて、とても充実した楽しい毎日を過ごしています。

LONTO：20年間突っ走ってきたので、そろそろ大衆に好まれる作品創りからは方向を変え、自分の思想や世界観を追求した作品創りをしていいのではないかと考えました。言葉の美しさも深さも便利さも知っていますが、その表現の専門家はすでにたくさんいらっしゃる。私たちは自分たちの表現として言葉を使わない舞台を追求していきたい。言葉なき相手の中にある心を感じ、目で見て聞く。人は心の中の言葉の方が声を発して伝える言葉よりもたくさん持っているのではないのでしょうか。その沈黙の中にある言葉を感じる、それはとても美しい瞬間。思いやりに繋がるとしています。そんな作品を丁寧にこだわりながら創っていきたいです。今はいろんなアーティストと直接話ができて、すぐにクリエイションできるのがとても楽しく心地いいです。

Chang：コロナ禍で公演数は減りましたが、仲間と助け合いながらここまでやってこれることができ、とても感謝しています。また、ラストラーダを立ち上げた時、他の団体からも運営方法などを教えていただき、大きな力になりました。今は、先輩たちから受け継いだものを次の世代につなげる手伝いを精一杯したい。そして、長く続けるために健康と事故には気を付けて、やりたいと思ったことは、機を逃さず敏感に捉えていきたいと思っています。

－互いに信頼し尊敬しあえるアーティストとして活躍されている、ChangさんとLONTOさん。これからもますますのご活躍を期待しています。



国際芸術祭あいち2022「らふいゆれふいゆ」（2022年）

なごや文化は寄附でもつ



名古屋市文化基金

支援・育成事業

— 市民やアーティストによる文化芸術活動を支援・育成 —



参加・体験事業

— 市民だれもが参加できるワークショップ・公演等を実施 —



鑑賞事業

— 優れた舞台芸術を鑑賞する機会を提供 —



市民文化の情報発信

— 情報誌の刊行などを通して、様々な文化情報を発信 —



皆さまからいただいた寄附金を活用し、なごや文化創造のための様々な事業を展開しています！

名古屋市文化基金の詳細および
寄附のお申込みはこちら



ご寄附に関する
お問い合わせ

名古屋市観光文化交流局
文化芸術推進課
TEL 052-972-3172

公益財団法人
名古屋市文化振興事業団
TEL 052-249-9390

頼もしい味方をお探しですか？



集客・販促プランナー



アートディレクター



印刷コンサルタント

駒田印刷株式会社 TEL(052)331-8881

〒460-0021 名古屋市中区平和2-9-12 http://www.kp-c.co.jp

WE MAKE YOU MOVE
感動をあなたへ

20Hz ← → 20kHz



PRO AUDIO & VISUAL & NETWORK
舞台音響／映像設備
設計・施工・保守・特注品製作・業務用機器販売

この領域を超えて最高のパフォーマンスを。

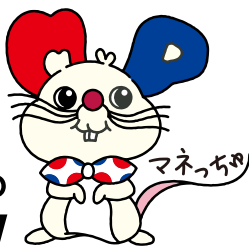
お客様に寄り添った先進のAVシステムを提案する
株式会社 エーアンドブイ
〒464-0846 愛知県名古屋市中区城木町二丁目98
TEL/052-761-5400 FAX/052-761-0909

公演・発表会の受付から制作業務全般まで、何でもご用命ください。美術展の受付も対応いたします。

業務内容

- ①舞台の企画・制作マネジメント
- ②イベントの企画制作
- ③芸術団体のコンサルティング
- ④舞台・イベントの運営

MANAGEMENT PRO
株式会社 マネージメント・プロ



〒461-0004 名古屋市中区東区葵2-11-22 アバンテージ葵ビル301
TEL:(052)508-5095 FAX:(052)508-5097 Web:www.mane-pro.com

「ナゴヤ劇場ジャーナル」ではサポート会員を募集しています。

ナゴヤ劇場ジャーナル

- ◎年間6,600円で毎月お手元にお届けいたします。
- ◎毎月24,000部発行
- ※東海地方の演劇・バレエ・音楽公演、ホール、DM 等にて配布

E-mail:mane-pro@mane-pro.com